所属番号	所属名	豊明市立沓掛中学校	ダイコ　ミオ 名前　大　古　実　央
8	愛知		

分科会番号	特	分科会名	「特別の教科　道徳」特別分科会

研究題目　　主体的に道徳性を養う生徒の育成を目指して

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた道徳科の授業改善に向けて～

研究要項

１　主題設定の理由

「Society5.0※の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」では、教育・人材育成システムの転換の方向性が提示された。統制のとれた組織のもとで機械・設備に合わせて標準化される工業化社会においては、同質性・均質性を備えた一律一様の教育・人材育成が求められ、一斉授業・平等主義のもとに世界トップレベルの教育・人材育成システムが大きな経済成長を支えてきた。しかし、人口減少・少子化の深刻化とともに、目の前にある「新たな価値創造」「イノベーション創出」「一人ひとりの多様な幸せ」を目指すSociety5.0 時代、そしてアフターコロナという大きな時代の転換期にある今、すべての生徒の可能性を引き出す教育・人材育成システムの抜本的な転換が急務である。これまで当たり前だった「みんな一緒に みんな同じペースで みんな同じことを」という一斉授業や形式的平等主義は限界を迎え、それぞれのペースで自分の学びを調整する「個別最適な学び」や、対話を通じて『納得解』を導き出す「協働的な学び」が学校教育に求められている。教師は「指導書通りに計画を立てて教える授業者」から「子どもの主体的な学びの伴走者」へと役割転換しなければならない。また、みんな同じことをやり、みんなと同じことができることを評価してきたこれまでの教育に対する社会全体の価値観を変えていくことも必要不可欠となる。しかし、平均点主義を脱し、「評価軸」を変えていくことは学校だけでは困難であり、企業・大学・保護者など社会全体の理解とともに変えていくことが重要となる。

このように「学び」は大きな転換期にある。明治以来１５０年の学校教育の歴史の中でも抜本的な転換である。大人の頭の中にあるかつて自分が受けてきた教育とは異なるため、それが一つ一つ実現されていくにつれ、不安や違和感が生じるかもしれない。しかし、大きなピンチは大きなチャンス。１５０年の蓄積を形にするチャンスである。新たな「学び」に挑戦することを楽しみたい。

さて、これを受けて「道徳科の授業どうしよう…」と頭を抱える。道徳科の授業でも抜本的な授業改革や授業改善が必要だ。昨年度の研究では、対話を通じて自分の考えを補強したり、発展させたりして学び合う「協同の学び」を中心に据えて、生徒主体の授業づくりを実践した。教師主導型の授業から生徒主導型の授業への転換の足場掛けができたと感じている。昨年度の課題は「教師の適切な介入」であり、これがより実現できれば対話の質は高まっていくと考える。昨年度の研究の成果と課題を活かしながら、今年度は授業者が「子どもの主体的な学びの伴走者」となり、Society5.0 の実現を目指した道徳科の授業を模索していきたい。ここでさらにヒントになりそうのが、生徒のアンケートにあった「自分とは異なる人の多様な考え、価値観などを肌で感じることができるのは学校の教室という対面の場であり、そこで得るものは何にも変えられない」という意見である。生徒たちは、多様な考えに触れることや「協働的な学び」を望んでいるのかもしれない。また、授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、さらにその成果を「個別最適な学び」に還元することで授業改善につながるだろう。「個別最適な学び」や「協働的な学び」を一体的に充実させることで、生徒の道徳性はより一層養われていくのではないかと考えた。よって、主題

を「主体的に道徳性を養う生徒(多様な考えに触れながら思考することで自分の『納得解』を導き出すことができる生徒と定義する)の育成を目指して」と題し、本研究に取り組むことにした。

※　Society1.0 狩猟社会　Society2.0 農耕社会　Society3.0 工業社会　Society4.0 情報社会　Society5.0 未来社会(超スマート社会)

2　研究の仮説と手立て

（1） 研究の仮説

学びの方法を選択させたり、教師が適切に介入したりすることで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体的に充実し、主体的に道徳性を養うことができるだろう。

（2） 研究の手立て

「個別最適な学び」〇学びの方法を選択させる。
①自己内対話の方法を選択させる。
②振り返りの方法を選択させる。

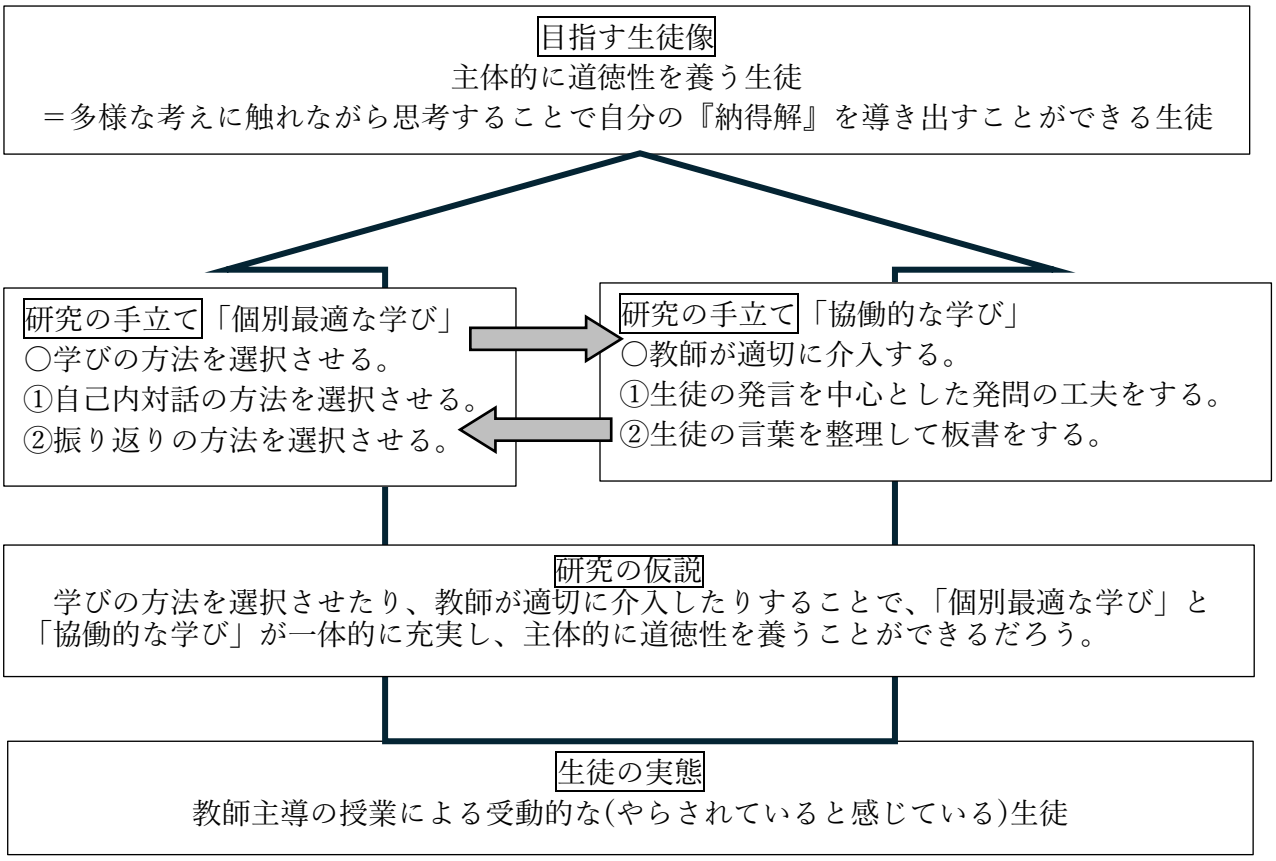
「協働的な学び」　〇教師が適切に介入する。
①生徒の発言を中心とした発問の工夫をする。
②生徒の言葉を整理して板書をする。

3　目指す生徒像

主体的に道徳性を養う生徒。

4　研究の方法・計画

（1） 研究構想図



（２） 対象生徒

中学３年生２０５名(チーム担任制・道徳科の授業はローテーション制)

（３） 検証の方法

ワークシートの記述・生徒の発言

5　研究の実際

（1）実践１【６月２１日(金)３年６組】

研究の手立て

「個別最適な学び」学びの方法を選択させない。(全員一律で振り返りを書かせる)
「協働的な学び」　教師が適切に介入する。

主題名　「あなたは顔で差別しますか」(内容項目Ｂ 相互理解・寛容)

本主題は、筆者の体験について考えることを通して、それぞれの個性や立場を尊重し、寛容な心をもって相互に理解し、謙虚に学び、自らを高めていこうとする態度を育てることをねらいとしている。筆者の藤井さんは２歳のときに海綿状血管腫を発症し、人と異なる容貌をもつ。幼い頃から「うつるのではないか」と言われ、ひどいいじめにあう。そのような体験から藤井さんは、正しい知識と思いやりの心をもつこと、そして他人と比較しないことが大切だと訴える。

導入(5 分)　筆者の写真を見せて、素直に感じたことをペアで共有させた。【「協働的な学び」】

→教科書に載っている写真を見るように伝えると教室は静まり返った。それぞれ多様な感じ方はあると思うが、全員ひとまず息を飲んで言葉が出なかったようである。そこで教師が「藤井さんを見てどう感じた？」と投げかけて、ペアで考えを共有させた。「何が原因なんだろうね。」や「見た瞬間はちょっとびっくりしたよね。」と素直な気持ちを吐露していた。「協働的な学び」の場づくりのため、授業の導入の際に、ペアやグループで対話させることは、昨年度から継続してきたことである。「対教師との学びの場」ではなく、「生徒主体の学びの場」を生み出せるようにした。

展開(30 分)　❶範読

❷主発問「藤井さんの生き方からどんなことを学びましたか」

→範読後、主発問を投げかけた。発問は、主発問以外準備していかない。生徒たちの言葉をもとに発問を考えることで、生徒中心の対話が進んでいくと考えた。生徒から出る言葉の方が他の生徒はよく聞き、よく考え、真剣に取り組むことができる。これは他教科でも感じていることである。教師が事前に考える発問よりも生徒たちの生きた言葉を大切にし、教師は「子どもの主体的な学びの伴走者」となって、生徒と一緒に学ぶ必要がある。

❸グループ対話⇄全体共有【「協働的な学び」】

→主発問をもとにグループ対話をさせた。多様な考えに触れながら思考することができるように、この後もグループ対話と全体共有を繰り返していく(資料１)。また、グループ対話をしやすくするために、全体共有で出た生徒の言葉を板書し、視覚的に捉えることができるようにした。生徒から出てきた生きた言葉を扱っていくため、「今これについて考えている」というものは板書に残した方が思考や対話がしやすい。さらに、全体共有で気を付けたことは、教師が聞こえのよい言葉だけに反応しないことである。

生徒の意見を無意識に評価してしまっていることになり、生徒はそれを敏感に感じ、いわゆる「よいこと」を言うようになる。教師が生徒の言葉をそのままもどしたり、つないだりすることで生徒主体の学びの場ができる。では、主発問ひとつでどのように授業を展開していくのか。本時では、より深く聞きたいと感じた生徒の考えに対して、「何でそう思ったの？」や「みんなはどう思う？」と問いかけ、「もどす」「つなぐ」という介入をした。生徒から出る言葉は、こちらがハッとさせられるもので溢れている。一見なんの変哲もない言葉や的外れのように思える言葉も生徒にもどしたり、つないだりすることで新たな考えに気付くことができるかもしれない。

資料１　全体共有での１コマ①②

《全体共有での１コマ①》
生徒Ａ「ひどいいじめにあったのに前向きに生きている姿勢を学びました。」
教師　「そうだよね。でもＡさんも前向きだから頑張ればできるんじゃない？」
生徒Ａ「いや、できません。差別されたのに相手じゃなくて自分を変えようとするなんて絶対できない。」
教師　「(周囲を見て)頷いている子もいるね。何で藤井さんは前向きな生き方ができたのかな。グループで話し合ってみよう。」

個人に「もどす」

グループに「もどす」

《全体共有での１コマ②》
生徒Ｂ「いろんな感情を乗り越えて、顔に腫瘍があることを「自分の個性」と捉えた藤井さんのように、自分の個性を短所と思わず大切にしていきたいと思いました。」
教師　「なるほど。Ｂさんがこう言っているけど、Ｃさんはどう思う？」
生徒Ｃ「うーん…自分の短所を個性にポジティブ変換するのは難しい…。」
教師　「って言っているけどＢさんどう？」
生徒Ｂ「だから藤井さんはすごいし強い。ただ意識するだけではこうは生きていけないと思う。」
教師　「こうは生きていけないの『こう』ってどう生きていくこと？」
生徒Ｂ「自分の短所を個性として大切にして前向きに生きていくこと。」
教師　「そうだよね。『意識するだけでは自分の短所を個性として大切に生きていくことはできない』ってＢさんが言っているけど、みんなはどう思う？グループで共有しよう。」

個人に「つなぐ」

個人に「つなぐ」

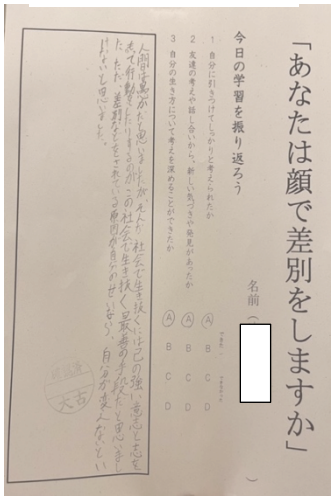
個人に「もどす」

グループに「つなぐ」

終末(15分)　①本時の振り返り【「個別最適な学び」】

→ここでワークシート(資料２)を配付し、振り返りを書くように伝えた。自己評価の項目と自由記述の欄を設けた。自己評価は、「1.自分に引きつけてしっかりと考えられたか」「2.友達の考えや話し合いから新しい気付きや発見があったか」「3.自分の生き方について考えを深めることができたか」の３点で行わせた。８割以上の生徒が「できた」の自己評価をした。「2.友達の考えや話し合いから、新しい気付きや発見があったか」を「全くできなかった」と自己評価している生徒もいた。これを次のグループ対話や全体共有で活かすことができれば、より深い学びや気付きにつながりそうだが、本時ではできなかった。

資料２　ワークシート


「あなたは顔で差別をしますか」
今日の学習を振り返ろう
名前
1 自分に引きつけてしっかりと考えられたか　Ⓐ B C D
2 友達の考えや話し合いから、新しい気づきや発見があったか　Ⓐ B C D
3 自分の生き方について考えを深めることができたか　Ⓐ B C D

②グループ対話⇄全体共有【「協働的な学び」】

→学びを振り返った内容についてグループ対話し、その後は展開と同様に全体共有していく(資料３)。教師の説話を聞くより真剣に聞き、対話によって学びをより深いものにしていた。

資料３　全体共有での１コマ③

《全体共有での１コマ③》
生徒Ｄ「人間は愚かだと思いました。そんな社会で生き抜くには強い意志と志が必要で、みんなで話し合っていく中で、『自分を変えること』が武器になると思いました。」
教師　「なるほどね。Ｄさんは今、『自分を変えること』は難しいの？」
生徒Ｄ「難しいです。相手が悪いと思いやすい。それが人間の愚かさだと思う。」
教師　「これを聞いてみんなはどう思った？」

（２）実践２【７月５日(金)３年３組】

基本的には実践１の流れと同じであるが、実践１とは異なる部分や「個別最適な学び」に着目した点について記述する。

研究の手立て

「個別最適な学び」学びの方法を選択させる。(自己内対話の方法・振り返りの方法)
「協働的な学び」　教師が適切に介入する。

主題名　「あなたは顔で差別しますか」(内容項目Ｂ 相互理解・寛容)

導入(5分)　⓪学びの方法を選択できることを伝える。【「個別最適な学び」】
→考えたことや他者の意見、気になったキーワードなどを書きたい人はワークシートに書く。心や頭で考えたい人はワークシートを使わない。書かないつもりであったが書きたくなってもいいし、ワークシートに残る言葉が一語でもいい。その都度、自分に合わせた学びをするように伝えた。また、書くタイミングはいつでもよいことも伝えた。ワークシートはこの段階で配付し、道徳綴りに貼り付けさせた。

①筆者の写真を見せて、素直に感じたことをペアで共有させた。
【「個別最適な学び」「協働的な学び」】
→自己内対話をさせるために「藤井さんを見てどう感じた？」と投げかけた後、「ちょっと考えてみて」と伝え、２０秒程時間を設けた。写真を見た瞬間と同様、教室には静かな時間が流れ、生徒はそれぞれが選択した方法で考えていた。

展開(30分)　❶範読

❷主発問「藤井さんの生き方からどんなことを学びましたか」【「個別最適な学び」】
→導入と同様、自己内対話ができるように、主発問を投げかけた後、２０秒程時間を設けた。まずは、自分が感じていることや考えたことを自分で整理できるようにした。生徒が活発に話し合う様子はないので、従来の授業から見ると不安になるところだが、生徒の自己内対話の時間や空気感を教師も味わうようにした。教師も生徒とともに自己内対話をすることによって、「子どもの主体的な学びの伴走者」を目指した。

❸グループ対話⇄全体共有【「協働的な学び」】

終末(15分)　①本時の振り返り【「個別最適な学び」】
→展開では、多様な考えに触れながら思考する様子が見られた。それを踏まえ、この振り返り活動によって「自分の『納得解』を導き出す」ことをしてもらいたい。教師が「今日の振り返りをしてください。書いてもいいし、考えたり、想像したりするだけでもよいです。この後、グループで共有するからね。」と伝え、自己内対話のための時間を設けた。このとき、ワークシート(資料４)に振り返りを書いている生徒がほとんどであった。

資料４　ワークシート

みんないろんなチャームポイントがあって、欠点があるけど、それを個性として取り入れることをしてみると、もしかしたら、周りの人も変わるかもしれないし、もし変わらなかったら自分だけでも変われば強い気持ちで過ごしていけると思いました。
○○くんの意見を聞いて、他人の意見を聞くことの大切さを改めて感じることができたから、これからは人に言われたことをもっと真剣に受け止めて自分がレベルアップできるようにしたい。
人間て面白いなと思いました。一人ひとり個性があって、才能があって、またそれに合った生き方をして、とても面白いと思いました。例えば、野球の大谷さんの生き方は僕にはできないし、藤井さんの生き方もできない。だからこそ人のために考え、思うことが大切と考え直すことができました。

②グループ対話⇄全体共有【「協働的な学び」】

６　仮説の検証

資料４のワークシートの記述や、資料１・３の全体共有の様子をみると、多様な考えに触れながら思考し、自分の『納得解』を導き出すことができているといえる。よって仮説は立証された。

７　成果と課題

（１）研究の成果

昨年度の研究では「協働的な学び」を中心に教師主導の授業を生徒主導の授業にするための授業改善を行った。課題であった「教師の適切な介入」については、生徒の言葉をもどしたり、つないだりすることで、生徒の対話に向かう姿勢がより前向きになったと感じた。授業時の観察から、対話の内容もより深いものになったり、他者の考えを参考にしたりしながら、自分の『納得解』を導き出すことができた様子であった。生徒の生きた言葉を扱うことは、一見難しいと感じるが、グループ対話や全体共有の際の生徒の姿をみると、生徒の言葉から「協働的な学び」が生まれることを実感できた。これによって教師が「子どもの主体的な学びの伴走者」となることができ、Society5.0 の実現を目指した道徳科の授業に近づくことができたと感じる。

また、それぞれのペースで自分の学びを調整する「個別最適な学び」や対話を通じて『納得解』を導き出す「協働的な学び」は、道徳の授業でこそやりやすいのではないかと考えた。「新たな価値創造」「イノベーション創出」「一人ひとりの多様な幸せ」を目指す Society5.0 時代に必要なマインドは道徳科の授業に詰まっていると感じた。Society5.0 時代に必要なものを教師も生徒も学んでいくことができる最高の教科である。Society5.0 の実現を目指した道徳科の授業を模索していくことが、他の教科の授業改善にもつながっていくと考えた。このように自分自身を時代に合わせて変化させていくことが、Society5.0 時代の教師といえるのではないか。

（２）研究の課題

本研究では、学びの方法を選択させることを「個別最適な学び」としたが、道徳科の授業での「個別最適な学び」は他にもあるのではないかと感じている。今後も、道徳科の授業における「個別最適な学び」を模索していきたい。さらに、学びの方法を選択させるという手立てを講じたが、ほとんどの生徒が振り返りをワークシートに書くなど、今までの方法に囚われている様子であった。学びを選択することが「個別最適な学び」の一つの手段であると理解させ、選択するという経験を積ませたいと感じた。多様な考えが存在するように、多様な学び方があることを教師が率先して示していかなければならない。

また、道徳科における「評価」についても課題が残った。今回の研究では、生徒が思考した記録が残らないため評価をすることが難しい。しかし、これは「教科だから評価しなければならない」という教師の都合である。「評価」に対する価値観を変えていくことがやはり必要であると感じている。道徳科の授業で学んだことは教師が目に見えて評価するべきなのか、問い直しをしていきたい。

参考文献

・「Society5.0 の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」
令和４年６月　総合科学技術・イノベーション会議
・「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)　令和３年１月　中央教育審議会
・中学校学習指導要領(平成２９年告示)解説　特別の教科 道徳編　平成２９年７月　文部科学省